

「ハウジング研究と社会学」

祐成保志

(東京大学)

Jim Kemeny, 1992, *Housing and Social Theory*, Routledge (祐成保志訳, 2014, 『ハウジングと福祉国家』新曜社) を手がかりに、ハウジング研究と社会学の架橋を試みる。

これまで社会学はハウジングをテーマとすることに消極的であった。建築学や都市計画学はもちろんのこと、経済学や法律学に比べても、その実績はかなり貧弱である。日本の社会学者のあいだでは、住まいという研究対象には固有の価値はない、という考えが根づよい。多くの場合、住宅問題は他の社会問題の代理指標として扱われるにすぎない。

ただし、ハウジングの社会学の発展のしかたは一樣ではない。1980年代以降、欧州諸国で社会科学の立場からのハウジング研究が活発になった。*Housing Studies* (1986年～) をはじめとする国際的な専門雑誌があいついで創刊され、ハウジングにかんする学際的な研究が発展した。ケメニーは、この動きを牽引してきた人物の一人であり、ハウジング研究の認識論・方法論を探求した *Housing and Social Theory* は、いまもお参照されつづけている。

本報告では、ケメニーの著作の意義を論じるとともに、1940年代に着手されつつも未完のままに終わった R・K・マートンのハウジング研究や、近年のハウジング研究の展開にも言及しながら、ハウジングの社会学の困難と可能性について考察する。